

〈研究発表要旨〉

本作りにおける空間性の考察

小林 克 司
(別府大学芸術文化学科 講師)

研究発表会(平成13年9月26日)での内容は下記の通りである。

- 組版における空間表現
- 紙面における空間について
- レイアウトパターンの考察

1. 組版における空間表現

書籍における表現要素として、文字、写真、イラストレーション、図表などが挙げられるが、その中でも特に重要な要素は文字である。文字は、情報を伝達する手段として、絵画や写真などよりも的確、かつ客観的に表現することが可能であり、普遍性を保つことの出来る道具でもある。そのような文字を書籍として紙面にレイアウトする際に、デザイナーは文字と文字の間隔や行の間隔、紙面全体に対する文字の割合などに考慮して、全体の構成を考える。

具体的には、文字を幾何形体(正方形・罫線)に置き換えて、図形の大きさや色彩の濃淡を変化させることによって、奥行きや空間的な変化の確認を、事例にしたがって検証を行った。また、文字の大きさや行間を変化させることによって、紙面上での濃度の変化を具体的なサンプルによって提示を行った。

2. 紙面における空間について

紙面上で文字の占めるエリアを、印刷用語で「版面(はんづら)」と呼ぶが、この版面の割合が紙面の印象を決定する重要な要素となっている。ここでは、ウィリアム・モリスの書籍を例に版面の割合(版面率)を示したり、各種書籍(文庫本・新書・単行本など)における版面率の違いを視覚的に提示することを試みた。また、分割された同じ平面を、異なったいくつかの色彩の濃度変化によって提示し、印象の違いをサンプルを用いて表現した。

3. レイアウトパターンの考察

授業内で行った作例をもとに、レイアウトパターンの考察を行った。学生の作例からは、平面的発想、部分集合的発想、全体的発想、移動的発想、分割的発想などが推測され、これらのパターンを図形によって視覚的に表示した。また、具体的なデザイン事例(大学案内)を用いて版面や見えないガイドラインなど、制作上の留意点をデザイン的な観点から解説した。